

[24]

氏名	筒井 優介
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第33号
学位授与の日付	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	夢 PCAGIP の開発に関する研究： グループでの夢理解のために
論文審査委員	主査教授 池見 陽 副査教授 中田 行重 副査教授 田村 隆一（福岡大学）

論文内容の要旨

本論は、本研究の問題と目的を提示する「第Ⅰ部（第1章、第2章）」、夢理解の新しい方法である夢 PCAGIP について、その実際を提示する「第Ⅱ部（第3章、第4章、第5章）」、夢 PCAGIP と従来の方法を比較し相違点を検討する「第Ⅲ部（第6章、第7章、第8章、第9章）」、夢 PCAGIP とコミュニティ形成について考察する「第Ⅳ部（第10章）」の4つから構成されている。

第Ⅰ部（第1章、第2章）では、従来の夢理論における問題点が整理され、本論における問題と目的が提示されている。第1章では、新しい夢理解の方法として論文提出者が開発した夢 PCAGIP について、その経緯を紹介するとともに、本論が立脚する視点を提示した。第2章では、従来の夢理論を取り上げ、本論の視点との比較を行った。夢理論は数えきれないほど存在するため、すべてを網羅することはできないが、本論は以下の夢理解の視点を取り上げた。精神分析学派としてフロイト (Sigmund Freud) とユング (Carl Gustav Jung) およびユング派の流れをくむ夢のグループアプローチであるボスナック (Robert Bosnak) の体現的ドリームワーク、認知行動療法学派、人間性心理学派としてパールズ (Frederick S. Perls) とジェンドリン (Eugene T. Gendlin) およびパールズを参考にしながら独自に実践している江夏亮、そして心理療法以外の夢理論として仏教僧侶プラユキ・ナラテボー師の実践を取り上げている。これらの理論と本論が立脚する夢理解の視点との違いを明らかにしている。

第Ⅱ部（第3章、第4章、第5章）では、夢 PCAGIP という新しい手法について、その手順や実際を示すとともに、この手法を体験することによって体験者にどのような変化が生じるのかを検討した。第3章では、夢 PCAGIP 開発にあたって参考にした手法や開発経

緯が紹介されている。第4章では、夢 PCAGIP において夢の意味がどのように成立しているのかを、夢の実例をもとに検討している。第5章では、夢 PCAGIP の実例の逐語記録をもとにして、参加者が夢 PCAGIP において何を体験するのかを検討した。

第Ⅲ部（第6章、第7章、第8章、第9章）では、夢 PCAGIP が他の方法とどのように違うのかを検討した。これにより、夢 PCAGIP にはどのようなオリジナリティがあるのかを示されている。第6章では、夢 PCAGIP 開発の参考になった方法の一つである PCAGIP を取り上げ、夢 PCAGIP との相違点を検討した。第7章では、開発の参考となったもう一つの方法である夢フォーカシングを取り上げ、夢 PCAGIP との相違点を検討した。第8章では、グループで実施される夢理解の方法の一つ目としてゲシュタルト療法を取り上げ、夢 PCAGIP との相違点を検討した。第9章では、夢理解のグループワークの二つ目として体系的ドリームワークを取り上げ、夢 PCAGIP との相違点を検討した。

第Ⅳ部（第10章）では、これまでの夢 PCAGIP 実践を概観し、どのようなコミュニティが形成されているのかを考察している。また、そうしたコミュニティ形成のために、夢 PCAGIP を実践する上で工夫した点および課題整理が行われている。以上をもとに、本論の最後に、今後の展望について検討がなされている。

論文審査結果の要旨

本論文は論文提出者が独自に開発した「夢 PCAGIP」を研究したものである。同法開発の参考になった PCAGIP については、その開発者の一人が本論の副査である。また、同法開発の参考になったもう一つの方法である「夢フォーカシング」について日本の代表的な研究者がもう一人の副査を努めている。論文提出者が「夢 PCAGIP」を提唱するに至るまでに、PCAGIP や夢フォーカシングを正しく理解し、そのうえで両方法を発展した形で本法が考案されていることが確認された。また、本法が他の夢理解のメソッドの影響を受けつつも、独立したものであり、実用可能な新しい方法であることが明らかとなった。

以下、本研究科が定める「博士論文審査基準（課程博士）」にしたがって、審査委員の見解を記述する。

(1) 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

本論文は論文提出者が開発した「夢 PCAGIP」に焦点が絞られたものであり、問題意識は明確である。また、同法の実施手順、実施例、他の夢理解の方法との理論的な違い、実践の場が臨床ではなく、一般市民のコミュニティーであることなど、同法の研究課題が適切に設定されている。

(2) 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

夢理解に関する先行研究は膨大であるため、本論文では夢 PCAGIP の開発に関連のある先行研究や夢理解の代表的な考え方及び現在日本で注目されている方法に絞り込むことで適切に選択し、これらを丁寧に吟味している。

(3) 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

本論では2つの研究方法が用いられている。本論で考案された夢 PCAGIP を他の方法と比較するために文献研究が用いられている。そして、夢 PCAGIP の実践から考察するためには事例研究が用いられている。これらは適切な研究方法である。

(4) 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得性があること

本論では夢 PCAGIP が開発される過程、夢 PCAGIP の実践、同法と従来方法の比較、及び同法が用いられるコミュニティについて論じられている。Gendlin 理論や PCAGIP 理論との違いを更に深く記載することが出来れば、本法のオリジナリティが一層明確になると思われるが、本論自体も適切な構成を取っており、整合性、一貫性、説得性がある。

(5) 全体を通して社会的・学術的な独創性が認められること

本論文が提唱する夢 PCAGIP はオリジナルな方法であり、そこに論文提出者の独創性がみられる。また、同法はすでに学会誌『人間性心理学研究』に掲載されており、このことにより、専門学会でもこの方法の独創性が認められていると言える。

(6) 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

本論文が提唱する夢 PCAGIP は国内学会では『日本人間性心理学研究』において発表されており、加えてシアトル、ウィーン、神戸、上海で開催された国際会議で発表されている。また、本論の第4部にあるように、この方法は臨床場面の「患者」を対象としておらず、夢の意味に興味がある一般市民が対象である。この方法を用いて夢と取り組むコミュニティーがすでに形成されている。このように、本論文が提唱する方法は、専門学会における研究者たちや、一般市民に対しての貢献が認められる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。